

第 26 号 (2026 年 4 月 17 日) 発行: 広島大学マスターズ広島事務局

今回のキーワード: 「まだまだ元気。一緒にいかがですか？」

今号は「広島大学マスターズ広島」の紹介を兼ねております。昨年度末までに本学を退職された教職員の皆様に向けて、当会への新規加入をお誘いするため資料としての役割も持たせる方針で編集・発行いたしました。広島大学の講義担当からミニ懇話会や例会といった取組まで当会の様々な活動を紹介するとともに会員からの寄稿も掲載しました。皆様の目に留まって新規加入に結び付くことを願っています。

2025 年 5 月 8 日に会報第 25 号を発行いたしましたが、本号はその前後から 2026 年 3 月末までの本会の活動を対象とした記事を掲載しております。

【お詫び】当初予定していた「第 5 回ミニ懇話会」開催報告は第 27 号に掲載します。

【読者の皆様へ】当会のウェブサイトにも是非アクセスしていただくようお願いしたいと思います。以下の URL にアクセスして、「お知らせ」、「事業概要」、「会報」、「例会などの案内と報告」などのページをご覧ください。本号記載の項目や関連する項目について、より詳しく説明した記事あるいは別の視点から記述された記事の閲覧、ファイルのダウンロードができます。

[「広島大学マスターズ広島」のホームページ](#)

【目次】

1. 会員からの寄稿
 - 1.1 第 12 回会員総会懇親会代表幹事挨拶 …… 植村泰夫
 - 1.2 広島大学マスターズ 2025 年度総会参加記 …… 植村泰夫
 - 1.3 「なぜ僕はマスターズ広島に参加したのか？」 …… 水羽信男
2. ミニ懇話会開催報告 — 内容の概要と解説
 - 2.1 「第 6 回ミニ懇話会」開催報告 …… 渡邊 敏正
 - 2.2 「第 6 回ミニ懇話会」解説
— 岩崎文人先生講演「原子雲の下で」を聴いて — …… 有元伸子
3. 2025 年度秋の例会実施報告
 - 3.1 2025 年度「秋の例会」実施報告 …… 渡邊敏正
 - 3.2 錦帯橋と岩国城の礎 …… 於保幸正
4. 広島大学から依頼された講義担当
5. 2025 年度 総会および幹事会の開催
6. 今後の予定
7. 会員異動
8. その他

1. 会員からの寄稿

1.1 第12回会員総会懇親会代表幹事挨拶

植村泰夫

本日は猛暑の中、総会・懇親会にお集まり下さり、誠にありがとうございます。この機会に、一言ご挨拶申し上げます。本会は2010年8月に、「広島市在住の広島大学の元教職員及び本会の活動に関心のある者を中心として、会員相互の親睦・交流等を深め、地域社会及び広島大学のニーズに対応した活動に協力するとともに、広島大学の行う社会連携等の各種事業を支援することを目的」として発足し、(1)会員相互の親睦・交流、(2)地域社会のニーズに対応した活動及び市民の生涯学習に対する支援、(3)広島大学が行う社会連携等の各種事業に対する支援、(4)その他本会の目的達成のために必要な事業、を活動内容にして来ました。現在、15年目にあり、この間に以上の目的と事業に沿った様々な活動を展開してきました。

振り返ってみますと、その活動は2020年前半までは順調でしたが、この年から大流行した新型コロナウイルスの影響を受けて大幅な修正を余儀なくされ、「平和科目」その他の「広島大学が行う社会連携等の各種事業に対する支援」はその後も地道に継続されましたが、この年に創立10周年を記念して8月29日に実施することを計画しておりました「10周年記念会員総会・懇親会(第11回総会)」、「10周年記念シンポジウム」(当時の植木研介代表幹事が提起されたもので、広島における平和教育をめぐって:現状と課題-被爆75周年という節目の年に、広島の「平和科目」、さらには広島の小中高等学校で行われている「平和教育」の現状について考え、今後の課題を探るシンポジウム)は取り止めになり、唯一実現したのが会報「創設10周年記念特集号」の発行にとどまりました。コロナはそれ以降もますます熾烈さをまし、幹事会を開くことさえままならない状態が続き、活動は大きく停滞し、新入会員の勧誘もストップせざるを得ない状況が続きました。

状況が好転し始めたのは2023年からで、例えば11月17日開催の第52回幹事会では次期幹事(候補)選出、「広島リカレント学院」への対応、会則の見直し、提供している授業「学問と社会」をどうするか、次回の総会をどうするか、といった具体的な課題が論議されております。

こうしてようやく2024年4月27日(土)に約5年ぶりに第11回総会を開き、この5年ほどの時期の活動を総括し、今後の活動計画を議論・決定することができました。ただし、この総会では幹事以外の参加者は1名にとどまり、懇親会も開かれませんでした。それでも、これをきっかけにマスターズ広島の活動が再開されたわけで、コロナ前の水準を回復する展望が開けたのでした。これ以降、現在に至る活動の詳細は後になされる「活動報告」で詳細に述べられますので、ここでは省略いたしますが、今後の会の活動の問題点と課題について、私が考えていることを最後に少しかけておきたいと思っております。

第1は、幹事会の「高齢化」です。現在の幹事は後期高齢者が大半を占めており、定年直後の60代の会員が幹事会に加わって、「若い力」を発揮してほしいと考えております。

第2は、会員が元教員に偏りすぎており、元事務系職員が極めて少ないことです。特に、このところ、会の活動方針を決める幹事会には、常時出席する元事務系の方はゼロです。このため、会の活動も元教員中心の発想に基づくものになっております。私は総務担当幹事を勤めておりました時に、「ミニ懇話会」で元事務系職員の方の話題提供をお願いしようと計画したことがあ

りましたが、残念ながらその方のご家庭の事情で実現には至りませんでした。これが実現しておれば、事務系職員と教員の間のような誤解や考え方の違い、お互いがおかれてきた立場の違いなどが、もっとよく理解できたと考えております。

第3は、先に触れました10周年記念行事の企画に際し提起された、「シンポジウム」についてです。私は、これは「広島大学マスタース広島」が大学の枠から一歩外に踏み出し、より広い視野から我々の活動を再検討できる可能性を持つ貴重な取り組みだったと考えており、これが実現しなかったのは残念です。いずれにせよ、我々はそろそろこのような外に目を向ける方向を目指してもよいだろうと考えております。

以上、考えていることの一部を述べさせていただきましたが、会員のみなさまには企画されております会の活動に、是非とも多数ご参加いただきますよう、心からお願いいたします。どうもありがとうございました。

1.2 広島大学マスタース 2025 年度総会参加記

植村泰夫

6月7日(土)16時から17時、西条駅前の賀茂泉館1階居酒屋「しょうの助」で開催された広島大学マスタースの総会に参加した。参加者は会員数95名に対して27名、会場を埋め尽くしており、昨年度の私たちの総会が幹事+1名にとどまったことからすれば非常に多いと感じたが、代表幹事の上真一先生によれば、今年は少ないとのことだった。

総会では先ず4名の物故者への黙祷がおこなわれ、その後、開会の辞、来賓紹介、代表幹事(上真一先生)の挨拶、来賓挨拶(東広島市副市長、広島大学マスタース広島代表幹事)が続いた。この場で植村は、広島大学マスタース広島がコロナ禍の中で如何に活動が困難になり、その後、昨年の総会を経て、現在、どのようにして通常の活動に戻りつつあるかを説明した。

その後、協議事項として2024年度の事業報告、会計報告、監査報告、さらに2025年度事業計画、予算案、その他が提案され、いずれも審議の上で承認された。次いで報告事項では、昨年度総会以降の新入会員が6名であること(うち5名の方については、配布資料に自己紹介が掲載されていた)、「広島大学マスタース友の会」の解散などが報告された。

これらの報告を聞いて感じたのは、活動が我々の会よりも多彩であることだ。例えば広報活動では講演会の広報を東広島市のホームページ・市民活動情報サイト・X(旧ツイッター)、フェイスブックなどでもおこなっている。東広島市民講座(同市主催)では「東広島を楽しくスケッチしよう」、「大規模災害と被災者支援」、「小学生のための実践的な将棋講座」、「自分史を語る—学生運動・広島大学の統合移転」、「交通事故の法律問題」が予定されており、また「出前講座」として「東広島市生涯学習まちづくり講座」に「健康寿命を延ばす食べ物」、「小学生のためのおもしろ理科実験」、「大規模災害と被災者支援」の出講が予定されている。こうした地域に密着した活動は、広島市ではなかなか困難であると思われるが、われわれも被爆75年の記念行事としてかつて議論があった、平和教育をめぐるの広島市教育委員会との共同事業プランなどをもう一度検討してみることが大事なのかも知れない。この他、広島リカレント学院、ちゅーピーカルチャーセンター「レギュラー講座」への講師派遣もおこなわれている。

広島大学への教育支援では、われわれ同様に「平和科目」、留学生のための短期研修講座への協力がおこなわれている。担当の幹事のお話では、西条には歴史学専攻の会員がいないの

で、平和科目などでは我々の協力を求めたいとのことであった。

いずれにせよ、西条と広島との2つの会が、それぞれの特性を生かして、お互いに刺激し合って活動を発展させていきたいものである。

1.3 「なぜ僕はマスターズ広島に参加したのか？」

水羽信男

広島大学マスターズ広島に昨年新入会した水羽信男といいます。入会にあたっては、広島大学マスターズと広島大学マスターズ広島の違いが分からず、幹事の方々にはご迷惑をおかけしました。広島大学に在職した教職員が、退職後の相互の交流と社会貢献を住居地に応じて実現しようとしているため、それぞれが独立した運営をされていることについて、幹事の方々の丁寧な説明で理解しました。

私は1960年に広島に生まれ、以後、小学校から大学・大学院まで自宅から一番近い学校に通ってきました。広島大学との付き合いも1978年4月に東千田キャンパスの文学部に入学してから、2025年3月に東広島キャンパスの大学院人間社会科学部研究科・総合科学部を退職するまで、数えると47年間でした。今年の退職時には、そろそろ広島大学との関係を終えてもよいのでは、という気持ちも正直にいえばありました。

にもかかわらず、マスターズに入会した要因の最大のものは、広島大学図書館を通じて文献複写や図書貸借の依頼をする「権利」を得るためです。規定では単に名誉教授であるだけでは、広島大学を通じて外部とやりとりすることはできないようで、退職後も研究を続けるならば、マスターズのメンバーになる必要がありました（科研の代表者であれば、大丈夫のようですが）。

マスターズ入会の成果というのは、言い過ぎですが、2025年9月にフェリス女子大学の泉谷陽子さんや、駿河台大学名誉教授の井上久士さんと『やさしい中国近現代史』（勉誠社）を公刊しました（写真1）。関心のある方にはお手にとりご覧いただければ、と願っています。また地元の公立図書館への推薦もお願いします。

この書名からもお分かりだと思いますが、私の専門は中国近現代史です。昨今の中国との関係を踏まえたとき、まだまだやるべきことはあるだろうと感じています。そして第五師団の司令部があり、日清戦争時の臨時首都



写真1：共著の表紙

ともいえる広島に生を受けた以上は、広島さらには日本と中国・アジアとの関係についても考える必要があるだろうと考えています。

いまひとつの要因は、他人と接する機会をできるだけ維持しておくべき、という周囲のアドバイスでした。総会以外の企画にはこれまで参加できなかったのですが、今年になってはじめて2月28日に岩崎文人さんの「原子雲の下で：大田洋子・原民喜・栗原貞子・峠三吉」（第6回ミニ懇話会）に参加させていただきました。今年82歳になられる岩崎さんの若々しい情熱的な、そして最新の資料に基づくお話はとても刺激的でした。「まだまだやらなきゃ」と感じながら、帰途につくことができました。

とはいえ、気力も落ち、生来の出無精もあり、前途多難だと自分でも良く分かっています。こんな新入会員ですが、これからもどうぞよろしくお願いします。

2. ミニ懇話会開催報告 — 内容の概要と解説

2.1 「第6回ミニ懇話会」開催報告

渡邊 敏正

第6回ミニ懇話会が、岩崎文人先生（広島大学名誉教授、元教育学研究科・教育学部）を話題提供者として

『原子雲の下で—大田洋子・原民喜・栗原貞子・峠三吉—』

なるタイトルで開催され、聴取者は11名でした。これまでと同様に幹事会に引き続き開催され、幹事会に出席した7名の幹事以外に4名の参加がありました。今年度に加わられた有元会員と水羽会員、並びに広島大学大学院人間社会科学研究科の佐々木先生の3名の方たちに加えて、松水会員が元気なお姿を見せられました。このところ体調不良とお聞きしていただけに幹事一同にとっても大変喜ばしいことでした。会場のM302講義室は比較的広めですが、若々しくて内に秘めた情熱が我々に伝わってくるような先生のお話ぶりは聞き手を話し手にグッと近づけ、実に有意義なミニ懇話会となりました（写真1）。

お話の詳しい内容と関連する解説については、有元会員が執筆してくださることになっておりますので、ここでは広報担当幹事とし



写真1：資料を手に説明中の岩崎先生

て感想を交えた当日の概要を記述して、開催報告といたします。

話題の中心は、原爆文学とそれを支えた文学者たちでした。1945年8月6日の広島への原爆投下を起点として、その前後におけるこれら文学者の原爆文学との関わりおよび原爆文学の推移について、詳細な資料に基づいて解説をしてくださいました。「原爆文学」という言葉は当方には馴染みがなかったのですが、原爆がもたらした人類未曾有の悲惨を直接的にあるいは間接的に扱った文学作品の総称、という理解に基づいてお話を聞かせていただきました。

講演の始まりは、広島、長崎への原爆投下に関するアンケート結果の紹介とコメントでした。具体的には、NHKが2025年5月～6月に実施した「戦後80年に関する意識調査」において、広島県民と長崎県民それぞれについて無作為抽出した18歳以上の1800人を対象に原爆投下日を聞いた場合の正答率を紹介されました。広島県民の調査有効数は1097人で正答率が広島(8月6日)について97.6%、長崎(8月9日)について90.3%ということでした。ただ、投下の西暦年あるいは元号まで合わせて聞くと正答率低下が予想されているとも話されました。小中学生について同アンケート結果は未公開ですが、2015年公開の広島市教育委員会による同様の質問(ここでは広島投下の年月日を問う)に対しては、広島市の小学4～6年生および中学生の正答率がそれぞれ75%および78.3%ということでした。しかしながら、原爆がどこから運ばれてきたか、という質問になると根拠のない回答が殆どであったということも踏まえ、原爆投下対象がなぜ広島や長崎になったか、などについても合わせて事実を正確に伝える必要性を強調されました。このようなデータを知って当方は少なからずショックを受け、正答率は決して高くない、もっと知らせなければ、という思いが消えませんでした。さらに、1945年2月4日から8月6日までの原爆投下に向けた米英ソの動き、8月6日の午前0時37分から原爆炸裂の8時15分さらに午後1時58分までの米軍爆撃機エノラ・ゲイの動きについて、詳細なデータを提示しながら説明してくださいました。また、「原爆被害の初公開」なるタイトルで悲惨な被爆の実像を明らかにしたアサヒグラフの記事について雑誌の実物を示しながら紹介されました(写真2、写真3)。これらのこともアンケート



写真2: 回覧されたアサヒグラフ



写真3: アサヒグラフを手にした岩崎先生

に関するお話と共に強く印象に残っています。

原爆文学は、まず被爆した文学者によって作品が書かれ、その後、被爆はしていないものの原爆の非人道的、非人間的な悲惨さに突き動かされた文学者による作品の出版が続き、一つのジャンルとして形作られたということでした。講話は、原民喜、峠三吉、大田洋子、栗原貞子などの原爆文学者に焦点が当てられました（写真4、写真5）。この方たちの生きた時代背景をベースに、被爆という現実の中で書かれた代表的な作品について、作品のポイントとなる記述部分と共に執筆の経緯や作品の持つ意義などが詳細に記述された縦書きの資料を作成・配布さ



写真4:講演中の原民喜
(回覧された写真)

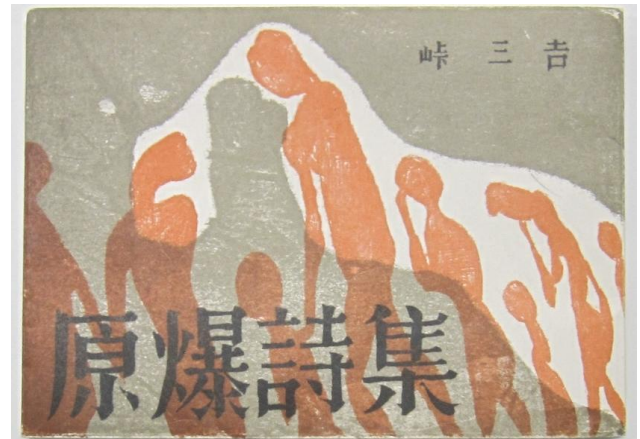


写真5:回覧された峠三吉の詩集

れ、それに基づいて説明をされました。

また、GHQ などによる検閲という表現への抑圧があった時代における作品出版への影響の具体例として、検閲により作品自体の内容や体裁が全く別物になって世に出ることがあったこと、それを文学者自身の作品そのものと受け取った世間、など今では想像し難い状況があったことを話されました。さらに、これらの方々の文学碑についても写真が回覧され、お聞きした説明からこれらの文学碑が当方の自宅のごく近いところにあることを知り、広島で生まれ育った者として驚きと恥ずかしさが交錯しました（写真6、写真7）。原爆の悲惨さを表現したものとして文学作品以外にも記録・報道、絵画、映画・写真、漫画、歌曲などにも言及されました（写真8）。また、原爆文学とその時代背景を語るとき、戦争の被害者としての側面が強調される傾向にあるけれども加害者の側面も忘れてはならない、という指摘もされました。

講演の終了後に、若年層を対象に原爆の怖さ、被爆の悲惨さを伝えようとする取組に関連して、『あまりの酷さに以後見たくない気持ちが強くなる、あるいはショックが大きすぎてトラウマになってしまう、という現実にはどのように対応すべきでしょうか』という質問が出ました。それに対して、先生は「原爆のあまりに酷い実像を最初から見せることは控えて、少しずつ徐々に原爆の怖さ、被爆の悲惨さの現実を説明していくことが有効な選択肢と思われる」と答えられました。反核・平和活動を推し進める際の一つの基本的な手順が示されており、心に留めておくべきことと考えています。原爆文学とそれを支えた作家およびその作品を通して原爆の怖さや被爆の悲惨さを炙り出し、我々に反核・平和教育へのメッセージを示された、と捉えています。厚く御礼申し上げます。



写真6: 栗原貞子文学碑の写真を手に
説明中の岩崎先生



写真7: 大田洋子文学碑



写真8: 回覧された漫画
「ある惑星の悲劇」のページ

【第6回ミニ懇話会】 2026年2月28日(土) 15時15分~16時45分
東千田未来創生センター3階 M302 講義室にて開催

2.2 広島大学マスタース広島 第6回ミニ懇話会解説 ——岩崎文人先生講演「原子雲の下で」を聴いて——

有元伸子

2026年2月28日、広島大学東千田キャンパスにおいて、広島大学マスタース広島第6回ミニ懇話会が開催された。講師は広島大学名誉教授であり、元ふくやま文学館館長を務められた岩崎文人先生で、題目は「原子雲の下で——大田洋子・原民喜・栗原貞子・峠三吉——」であった。

岩崎先生は、1944年岡山県生まれ。国木田独歩、正宗白鳥、井伏鱒二といった地域ゆかりの作家研究をはじめ、『広島県現代文学事典』の編纂や原爆文学研究、とりわけ占領期の検閲問題に関する実証的研究によって知られる。本講演においても、長年の研究成果に裏打ちされた豊富な資料と緻密な構成により、原爆文学の問題を多角的に提示された。

講演は、近年の原爆に関する意識調査の紹介から始まった。広島県では平和教育が充実しており、子どもたちの原爆に関する基本的知識については高い理解が見られる。しかし一方で、原爆投下に至る過程や、アメリカ側の事情については十分に知られていない現状が指摘された。テニアン島や硫黄島の戦略的重要性、さらには原爆投下候補地として京都、新潟、広島、小倉、長崎が挙げられていたことや決定の状況など、広島に住む私たちにとっても必ずしも自明ではない事実が丁寧に説明された。

また、広島原爆被害を象徴する「きのこ雲」の写真が、米軍機によって急旋回ののち松山上空付近から撮影されたものであることなど、戦争の実態を具体的に把握するための視点も提示された。こうした説明は、被爆の出来事を単なる「知識」としてではなく、歴史的現実として捉え直す契機となるものであった。

とりわけ印象的であったのは、被爆の実相をめぐる語りの問題である。被爆者が描いた絵において、人々が腕を上げて逃げる姿が繰り返し描かれているのは、強烈な熱線によって皮膚が垂れ下がるためであるという説明がなされた。そして「本来、語るべき人々がすでに亡くなっている」という指摘は重い。原爆によって1945年のうちに14万人もの命が奪われたが、その一人ひとりに固有の人生があったはずであり、それを単なる数字として記号化してはならないという強い問題提起がなされた。

この点において、文学の果たす役割が強調された。文学は、「原子雲(きのこ雲)の下で」亡くなった人々を、顔と名前をもった個々の存在として描き出し、その記憶を次世代へと伝える営みである。被爆体験の直接の語り手が減少していく今日において、文学の意義はいよいよ増しているといえよう。

講演の中核では、充実した配布資料に基づき、原爆文学を代表する4人の作家——大田洋子、原民喜、栗原貞子、峠三吉——の作品が紹介された。さらに、8月6日の出来事が文学のみならず、記録、絵画、映画、写真、漫画、歌曲など多様なメディアにおいてどのように表現されてきたかが整理された。多くの本や写真を示しながらお話され、回覧された資料の中には、原民

喜が亡くなる前年に広島で行った講演の写真など貴重なものも含まれており、参加者の関心を集めていた。

また、漫画作品にも言及があり、旭丘光志『ある惑星の悲劇』など、地球規模の視点から核を捉える試みが紹介された。こうした視点は、近年の環境問題やエコロジー的思考とも響き合うものであり、原爆文学の射程が現在的な問題とも連続していることを示している。

さらに重要な論点として、占領期における表現の抑圧、すなわち GHQ による検閲の問題が取り上げられた。CCD（民間検閲支隊）による検閲は、事前・事後の両面で行われ、原爆に関する記述も厳しく統制された。原民喜の「夏の花」が当初「原子爆弾」という題であったにもかかわらず変更を余儀なくされたことや、大田洋子の『屍の街』が最初は完全な形では発表できなかったことなど、具体的事例が示された。

とりわけ興味深いのは、占領軍による検閲の方法である。戦前の日本の検閲では伏せ字などによってその痕跡が可視化されていたのに対し、占領期の検閲は活字を組み直させるなどして、検閲の存在自体を読者に気づかせない巧妙なものであった。その結果、出版社や作家の側に自己検閲が生じ、表現の自由が大きく制約されていた実態が明らかにされた。

講演の終盤では、広島の歴史を「被害」と「加害」の両面から捉える必要性が指摘された。広島は原爆による甚大な被害を受けた都市であると同時に、日清戦争時には現在の広島城跡に大本営が置かれ、帝国議会も開かれて首都機能を担い、宇品港から多くの兵士が出征した軍都でもあったという複雑な歴史認識が提示された。栗原貞子の詩「ヒロシマというとき」を引きながら、被爆の記憶と加害の歴史を切り離さずに理解することの重要性が強調されたのである。

岩崎先生は、私にとっては故・磯貝英夫先生の門下の大先輩であり、大学院生時代からご指導を仰いできた。のちに同じ広島大学に勤務する機会を得て、研究や学会活動においても多くの示唆をいただいた。本講演では、90分にわたり立ったまま、マイクを用いずに明晰な語りを続けられるそのお姿に、変わらぬ研究者としての気迫を感じ、深い感銘を受けた。

本講演を通して改めて認識させられたのは、原爆の記憶をいかに若い世代に継承していくかという課題の重さである。被爆者の高齢化が進むなか、直接の体験を語る声は確実に減少している。そのとき、文学や教育、さらには多様な文化的な表現媒体が果たす役割は極めて大きい。子どもたちに、原爆のもたらした悲惨な体験を、正確に、しかしトラウマを与えることなく伝えること。と同時に、広島の歴史を単純化することなく、その複雑さと向き合う姿勢が求められている。核の使用が危惧されている現在の逼迫した世界情勢にあって、今こそ原爆文学を手にとり、考え続けなくてはならないだろう。

今回のミニ懇話会は、こうした課題について改めて考える貴重な機会となった。会後の親睦会においても、岩崎先生や会の皆さまと親しく語り合い、有意義な時間を過ごすことができた。多様な分野の会員が集う本会において、広島の原爆をめぐる問題が共有された意義は大きい。今後もこのような場が継続され、議論が深められていくことを期待したい。

3. 2025 年度秋の例会実施報告

3.1 2025 年度「秋の例会」実施報告

渡邊敏正

広島大学マスタース広島では、会員間の交流と親睦を深めるために例会を毎年開催しています。今年度は春の例会でオタフクソースの本社工場を訪問しましたが、秋の例会としてお隣り山口県岩国市の「錦帯橋と周辺の散策」を企画・実施しました。本稿はその実施報告です。

例会の開催要領

【目的】 山口県岩国市の錦帯橋と周辺の散策

【日時】 2025 年 11 月 13 日(木) 10:15 ~ 17:30

【スケジュール】 (雨天決行:歩きやすい靴での参加を要請)

- 10:15 広島バスセンター待合室集合
(バスの往復切符(1,800 円)をバスセンターで各自が購入)
- 10:35 広島バスセンター発(1 番ホーム、いわくにバス)
山陽自動車道経由
- 11:35 錦帯橋到着(河原へ降りて記念撮影、その後対岸へ渡橋)
- 12:00 昼食(瓦そば長州屋錦帯橋店、他)
- 13:00 吉香公園、岩国城などの自由散策
~16:00 16:00 に錦帯橋バス停に再集合(以下、例会実施前の予定)
- 16:15 錦帯橋バス停発
- 17:12 広島バスセンター到着、解散
(注) 諸事情により、参加者 5 名は 15:15 発のバスで、残り 3 名は
16:15 発のバスで、それぞれ帰途についた。

【参加費】 無 料

- 往復交通費および昼食代、錦帯橋の入橋料(310 円)および岩国城ロープウエーの乗車料(往復 560 円)、岩国城の入館料(270 円)等は各自で購入

【参加人数】 8名

【現地到着後の大まかな行動】 錦帯橋を渡る前に、錦川の河原に降りて記念撮影をした。それから橋を渡って対岸に移動し、昼食に近くの食堂でそれぞれの好みに応じて、瓦そば、岩国寿司、蓮根料理などのご当地名物を味わった。昼食後は、参加者の多数はロープウエーを利用して城山頂上の岩国城に向かった。ロープウエーに行く途中には紅葉谷公園、吉香公園、柏原美術館、岩国シロヘビの館など、訪れたい場所が多数あり、それらのいくつかを訪れて岩国城に向かったケース、あるいは下山後に訪れたケースなどが見受けられた。散策後の予定を早めに切り上げて帰途に就く、あるいはいろいろと見学してから帰途に就く、といった形で参加者の選択に応じて帰途のバス乗車時間は計画と若干異なり 2 通りとなった。代表幹事の下見に基づいた助言が、当日の参加者の行動に大いに役立ったことはここに記しておきたい。

以下に、錦帯橋と岩国城を中心に当日の様子をもう少し詳しく記述する。

【岩国市と錦帯橋】 山口県東部、広島県に隣接し瀬戸内海に面する位置に岩国市があり、錦

川が同市の北部中央付近から南下しながら蛇行を繰り返して次第に東に向かい、県境近くで瀬戸内海に注いでいる。錦帯橋は、JR 岩国駅から南西に延びる岩徳線の 2 つ目、川西駅からほぼ北の方向 1.5km 辺りで錦川を跨いでおり、方向としては北西から南東に延びる形で存在している(図1)。錦帯橋は世界に稀な木造のアーチ橋である。5 つの反り橋が統一的なアーチ形状で連結されて錦川にかかっており、橋を支える基礎部分は金属を使用せず木材のみで構成するという特殊な構造を持ち、5つの反り橋のうち内側の3橋のアーチは大きく膨らみ、両端の2橋のアーチは緩やかである(写真1)。その独特の形状は、構造物としての設計が優れていることだけでなく、芸術的なデザインの視点からも高い評価を得ている。木々に覆われた急峻な山、その麓を蛇行しながらゆっくりと流れる川、そこにかかる木造のアーチ橋、これらが織りなす景観が多くの人を魅了して止まない。



図1: 錦帯橋周辺地図(出典: 岩国市観光振興課発行のパンフレット「山口県岩国市観光ガイド」掲載の地図よりスキャナーで抽出、切り取りにより作成)

【出発から現地到着まで】9名の参加予定であったが、1名欠席で参加者は8名となった。当日の天気はまずまずで、気温は20度前後であった。予定通りバスセンターを10:35に出発し、バスは渋滞もなく順調に進み、定刻に錦帯橋バス停に到着した。

【記念撮影と錦帯橋の通行】バス停は錦帯橋入口のすぐ前にあり、降車後まずバス停の案内所窓口で、錦帯橋の往復通行料、ロープウエーの往復利用料金、岩国城見学入場料の割引セット券を全員が購入した。その後、錦川の河原に降りて錦帯橋をバックに全員で記念撮影をした(写真2)。



写真1: 5つの反り橋が連なる独特の形状を持つ錦帯橋



写真2: 錦帯橋をバックに記念撮影: 左から(敬称略)、寺本、渡辺、椿、鈴木、於保、大杉、渡邊、圓山の各会員

【錦帯橋を渡って対岸へ】撮影後に錦帯橋を渡り対岸へ移動した。橋を渡りながら、改めてその見事な構造に感心し、また水害などとの闘いや維持管理の大変さなどを想像しながら歩を進めた。橋を支える4つの橋脚は実に頑丈で、激流に耐えなければならない現実を目の当たりにした(写真3、写真4)。歩道部分は板を重ねた形状で板一枚が一つの段を構成し、歩行が実に楽である。歩道部分の板固定のために鉄製の釘が、また欄干などには薄い鉄板も使用されている(写真5、写真6)。



写真3:河原から見た橋脚
(山頂に岩国城を望む)



写真4:橋上から見た橋脚



写真5:板を積み重ねた階段



写真6:欄干

【岩国名物と昼食】対岸で、参加者の多数は予め決めていたそば屋で昼食をとったが、中には別の店で名物の蓮根料理を昼食とした参加者もいた。昼食後は、計画通り16時ころまでの自由行動となった。錦帯橋付近の錦川の河原や岩国城の周囲には様々な大きさ、模様を持つ岩石が多数見受けられ、岩石の成り立ち、組成などに興味を持つ参加者にとっては「岩石巡り」の非常に良い機会となったようで、昼食後には早速行動を開始していた。

【岩国城ロープウエーの山麓駅から山頂駅へ】錦帯橋からロープウエー山麓駅まで10分、頂上駅までのゴンドラ乗車時間3~4分、頂上駅から岩国城まで10分、という所要時間をパンフレットで見受けたが、ゴンドラは15分ごとに発着しており、岩国城までの実所要時間は30~40分と思われる。昼食後に、参加者の多くは岩国城を目指した。山麓駅までは吉香公園を通り抜

ける道を選んだ。途中では樹齢を感じさせる立木や武家屋敷の構えを残す香川家長屋門を見ながら、一方では大規模の噴水に圧倒される、など新旧の対比を感じながら移動した(写真7、写真8、写真9)。ゴンドラに乗った後は、どんどん離れていく山麓駅と逆に広がっていく周囲の風景を楽しみ、程なく山頂駅に到着した(写真 10)。山頂駅を出ると岩国城に向かう道の選択が必要となる。右は「未舗装の旧道」できつい坂道が予想され、左は道幅が広くて勾配が比較的緩やかそうに見える「舗装道路」であった。少し迷ったが、今の体力を考えて左の道を選択した。しかし、意外に長くて予想以上の勾配があった。10 分の歩行時間は、「高齢者には十分な負荷のある道」という意味だったのでは、と思いながらマイペースで歩を進めた。



写真7:樹齢を感じさせる立木



写真8:香川家長屋門



写真9:大噴水



写真 10:離れていく山麓駅と
広がる風景

【岩国城と山頂からの展望】辿り着いた頂上では、まず旧天守台の大きな石垣があり、少し離れて岩国城天守が見えた(写真 11、写真 12)。徳川幕府の一国一城令により、築城のわずか8年後に取り壊されたとのことである。現在の天守は昭和 37 年(1962 年)の再建であるが、天守の設置場所は麓の錦帯橋などからその姿が見えるように、築城時よりも 50m ほど南に変更されたとのことであった。1~3階は刀剣、甲冑、錦帯橋や岩国城に関する資料などが展示されている。4階は展望台となっており、そこからの眺望を堪能した。晴天ではあったがあいにく少し霧がかかっており、町並みの向こうにはっきりと見えるという岩国錦帯橋空港や瀬戸内海の島々はかすんでいた(写真 13、写真 14)。



写真 11:築城時の天守台



図 12:再建された現在の岩国城天守



写真 13:展望台からの眺望



写真 14:展望台にて(左から:敬称略)
圓山、大杉、椿の各会員

【帰りのバス乗車まで】都合で予定より早く帰途に就く参加者があり、事前に考えていたポイントの見学を終えたこともあって予定を変更して早めに帰りのバスに乗ることにした。下りのゴンドラから降りた後で錦帯橋に戻る際に再び吉香公園を通った。公園内には大きな立木や樹種が多いと感じていたが、その訳は掴めていなかった(写真7、写真15)。暫く行くと説明板に、吉香公園一帯は明治の初めころまで吉川藩の武家屋敷が軒を連ね、その後は旧制岩国中学校の



写真 15:楷の樹



写真 16:旧目加田家住宅

敷地であった、というこの地の歴史と共に、以前はここに教材樹林があった、という記述を見つけてその理由を納得した。さらに歩を進めていると、18 世紀後半の建築と推定され、中級武家の屋敷としては全国でも数少ない遺構の一つ、という旧目加田家住宅の前に出た(写真 16)。

内部の様子からその質素な生活ぶりが想像できた。遺構を出たあと錦帯橋まで戻り、再び橋を渡ってバス停に移動した。5名の参加者が15時15分発の広島バスセンター行のバスに乗車した。残りの3名の参加者は予定通り16時15分発のバスで帰途に就いたとのことである。

【あとがき】まずまずの天候の中、秋の例会が予定通り実施できたことは喜ばしいことである。錦帯橋を渡り、岩国城に上り、周辺を散策する、など楽しみながらできるだけ歩数を増やす、ということを実践する有意義な一日となった。一方で、参加者が全員幹事で一般会員の参加がなかったことは残念であり、反省点として記憶しておくべきであろう。

3.2 錦帯橋と岩国城の礎

於保幸正

岩石を長年観察していると、岩石が人々の手でどのように使われているのか、ついつい見てしまいます。例えば石垣はそれぞれの地域によって異なる岩石を使用し、石組みの仕方もそれぞれの地域の特徴をもっています。個人的な興味から錦帯橋周辺ではどのような石組みが使われているかみてみたいと思います。錦帯橋(写真1)は木製のアーチ造りの建造物として有名ですが、その礎についてはあまり言及されること

はないように思えます。錦帯橋の下を流れる錦川はたびたび氾濫していることは良く知られていますが、どのようにしてその氾濫を避けて橋の流出を防いでいるか、興味を覚えます。また、丘の上に建つ岩国城の石垣は石灰岩で造られていることは聞き及んでいましたが、どこから運ばれて来たのかについても興味をひかれます。今回、広島大学マスターズ広島の秋の例会として錦帯橋周辺に行くことになり、これらのことを知りたいと思って出かけました。錦帯橋では、案に違わず面白い工夫が見られました。皆さんは既にご存知の事だと思いますが、以下、洪水から橋の流出を防ぐための工夫を私なりに記載してみたいと思います。また、岩国城の石垣についても新しい発見はありませんが、気づいたことについて少し触れたいと思います。

錦帯橋は木造のアーチの橋として有名です。岩国市の観光Webサイトには、錦帯橋が最初に作られた当初、木造の橋は錦川の氾濫によって流出したことが、また、改良を加えることにより1674年に再建された橋は1950年まで洪水で流出することはなかった

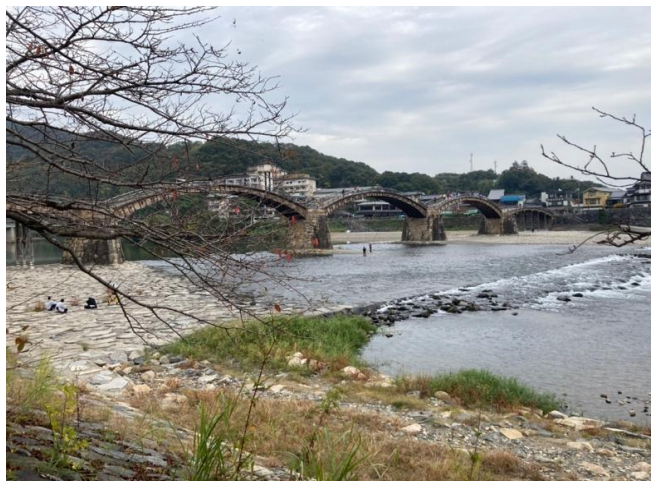


写真1: 錦帯橋全景



写真2: 三つのアーチ橋を支える橋脚

と記されています。山口県の錦帯橋に関する Web サイトには、錦川は暴れ川で、大雨時の土砂、流木、洗掘（河床の土砂が流されること）によって桁橋は流出したと書かれています。錦帯橋の写真をみると、五つある橋のうち両端の橋は桁橋であり、橋杭で支えられています。中3つの橋はアーチ橋で、四つの橋脚は見かけ上花崗岩の石積みで支えられています。アーチにすることによって洪水や流木を避けることは容易に察しがつきます。橋の上から石積みで造られた橋脚を良く見ると、川に面した箇所が先が尖り、船首のようになっています（写真2）。下流側も同様です。しかも、先端の石は木材の組込み栓あるいは楔のようなもので繋がられています。石を単純に並べるだけではなく、それぞれの石を繋いで、石組みを堅固にしているようにみえます。一方、両端の橋を支えている橋杭を見るために河原に降りて見ると、木製の橋杭は花崗岩の杭に接続しており、その接続部をみると単純に接するのではなく、木材の繋ぎ手のように溝が切られ、接する箇所の面積を大きくし、木の杭と岩石の杭が接する箇所の周りは金属で締められています（写真3）。これも洪水に対する備えでしょうか。それより驚くことは錦帯橋の下にある河原は数十 cm の大きさをもつ岩石（主に花崗岩）で広く覆われていることです。橋杭をさらに堅固にする工夫とも考えられますが、恐らく、水によって河床の土砂が流れてしまうような洗掘に対しても、岩石を敷き詰めることによって防いでいるものと考えられます。



写真3: 両端の桁橋を支える橋杭

このような工夫をみていると、当時の工事関係者にとって大きな問題は木製のアーチないし橋杭と岩石をどのように繋ぐかということかと思われます。その繋ぎ方として日本で長く使われてきた木製の継手の方法が、木材対岩石または岩石同士でも使われている様です。

錦帯橋の背後には標高約 200 m の尾根が伸びており、そこには石灰岩の石垣をもつ岩国城があります（写真4）。石灰岩を石垣に使ったお城は珍しいのですが、岩国城周辺には秋吉台のような大規模な石灰岩が分布している訳ではありません。岩国城の周辺



写真4: 岩国城天守（築城当時）の石垣

はジュラ紀に形成された付加帯の堆積物（海洋プレートが大陸プレートの下に沈み込む際に、海洋プレートの上に堆積した堆積物のはぎ取られ、陸側から持ち込まれた堆積物と混じり合って形成されたもの）が分布し、それは玖珂層群と呼ばれています。石灰岩はこの泥質岩を主体とする堆積物の中に海底地すべりなどによって入り込んだものだと考えられます。岩国観光振興

課のWebサイトには旧天守台から南西へ約1.5 kmの峰にある護館神から石灰岩は運ばれたと記してあります。石灰岩を下から持ち上げるのではなく、尾根沿いに運ぶのですから運搬は容易であったろうと推察されます。ところで、岩国城のすぐ北側にも石灰岩のブロックが散在しています(写真5)。もしかしたらそれらの石灰岩も石垣として使用されたものか、あるいは石垣に使われる以前の様子を示しているかもしれません。玖珂層群は広島県でも瀬戸内海の芸予諸島、例えば上蒲刈島、下蒲刈島、大崎上島などに分布しています。そこでは岩国城周辺と同じく石灰岩の小



写真5: 岩国城のすぐ北側にある石灰岩のブロック

岩体が観察されます。岩国城の石垣を造った人々は、このような石灰岩を見出したことによって容易に石垣を造ることができたのではないかと推察します。日本の多くの城では壁が漆喰で塗られ、その白さが強烈に目に焼き付きますが、岩国城が形成された当時、山の上に建てられた岩国城とその石垣までも白く輝いていたと想像すると、大変興味を覚えます。なお、岩国城の真下に位置する吉香神社の義濟堂灯籠の石垣では、花崗岩と石灰岩の両方が使われています。石灰岩は尾根から下に降ろされたのでしょうか。

4. 広島大学から依頼された講義担当

【2025年度】以下の講義を担当しました。

・教養コア科目

「平和と人間」C(統括・主担当:圓山幹事)霞キャンパス(第2ターム)

「平和と人間」D(統括・主担当:植村幹事)東千田キャンパス(夜間主・前期)

・大学院共通授業科目(医歯薬保健学研究科医歯科学専攻)

「健康生活科学」(統括担当:於保幹事)霞キャンパス(第3ターム)

【2026年度】以下の講義担当が決定しています。

・教養コア科目

「平和と人間」C(統括・主担当:圓山幹事)霞キャンパス(第2ターム)

「平和と人間」D(統括・主担当:寺本幹事)東千田キャンパス(夜間主・前期)

(注)2026年度は大学院共通授業科目「健康生活科学」は開講中止の予定

5. 2025年度 総会および幹事会の開催

【第12回総会および懇親会】

・開催日時 2025年8月28日(土)

総会：16時～17時 懇親会：17時半～19時半
・開催場所 広島大学東千田キャンパス 総合校舎L棟5階 SENDA LAB
総会：第1会議室 懇親会：第3会議室

【幹事会】

第61回 2025.5.10 東千田キャンパス未来創生センター4階 MR4-5
第62回 2025.6.14 東千田キャンパス未来創生センター4階 MR4-2
第63回 2025.8.2 東千田キャンパス総合校舎S棟第1演習室
第64回 2025.10.4 東千田キャンパス未来創生センター4階 MR4-2
第65回 2025.12.13 広島大学東千田キャンパス慎思棟(L棟)5階
SENDALAB 会議室2
第66回 2026.2.28 東千田キャンパス未来創生棟4階 MR4-6

6. 今後の予定

【2026年度総会及び懇親会】

開催日時 2026年6月13日(土)
第13回総会：16時～17時 懇親会：17時半～19時
開催場所 東千田キャンパス 慎思棟(L棟)5階 SENDALAB 多目的スペース
総会、懇親会ともに上記多目的スペース

【幹事会】

第67回 2026.4.25 東千田キャンパス未来創生棟4F MR4-6

【例会】

2026.4.2 春の例会：「比治山公園散策～お花見と現代美術鑑賞～」
(世話人：植村代表幹事)

7. 会員異動

【退任】下記の方が幹事を退任されました。

井上研二会員(元代表幹事)

【新入会員】下記の方々が新たに会員となりました。

有元伸子氏(元文学部) 三本木至宏氏(元生物生産学部)

水羽信男氏(元総合科学部)

【訃報】下記の会員の訃報が届きました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

佐々木博司会員(元工学部) 根平邦人会員(元総合科学部)

藤原 尚会員(元文学部) 原口健一会員(元事務部)

8. その他

【称号顕彰】下記会員に東広島名誉市民の称号が贈られました。

原田康夫会員(元広島大学長) (2025.8.1 称号顕彰式)

広島大学マスタース広島事務局
〒730-0053 広島市中区東千田町一丁目1番89号
広島大学東千田地区支援室気付
E-mail : masters2@hiroshima-u.ac.jp